

不信仰な私をお助けください

マルコの福音書 9章 14-29 節

はじめに

五月の第一週から四回に分けて、「信仰に生きる」というテーマで説教をしています。四回目の今日は、イエス様が、汚れた霊に取りつかれた子どもを癒される出来事から「信仰に生きる」ということを学んでいきたいと思います。

1. 父親と汚れた霊にとりつかれた息子の苦悩

ある父親が自分の息子の癒やしを求めてイエス様のもとにやって来たのです。この息子は、幼い時から汚れた霊に取りつかれていて、耳が聞こえず、口もきけなくなっていたのです。耳が聞こえず、口もきけない息子を抱えていたこの父親は、様々な面で苦労したと思います。

しかしこの息子に取りついていた汚れた霊は、耳を聞えなくし、口もきけなくするだけではなく、突然この子をところかまわず倒したりしたのです。その度にこの子は、泡を吹き、歯ぎしりして、からだをこわばらせたのです。さらにこの汚れた霊は、何度もこの子を殺そうとして火の中や水の中に、この子を投げ込んだりしたのです。この子には、絶えず怪我や命の危険がありました。いつ起こるか分からない発作的な行動に怯えながら、この親子は過ごしていたのだと思います。

そこでこの父親は、思い切ってイエス様のもとに息子を連れて行くことにしたのです。イエス様なら息子から汚れた霊を追い出し、癒やして下さるかもしれないと思ったからでしょう。

しかし、イエス様のもとに連れて行くと、イエス様はおらず弟子たちだけがいたのです。イエス様はこの時、ペテロとヤコブとヨハネを連れて、高い山に登っていたのです。仕方なく父親は、弟子たちに汚れた霊を追い出してくれるようにと願ったのです。しかし残念なことに、弟子たちには汚れた霊を追い出すことはできなかったのです。

この時の父親の落胆ぶりはどれほどだったでしょう。「やっぱりダメか。うちの子は特別だから癒されないのか」と思ったことでしょう。弟子たちが追い出せなかったから、イエス様にも追い出せないかもしれないと思ったことでしょう。

2. 弟子たちの不信仰

しかし、なぜ弟子たちには汚れた霊を追い出せなかったのでしょうか。弟子たちは以前、イエス様から汚れた霊を制する権威を授けられて、二人ずつ宣教旅行に遣わされたことがありました。その時は、多くの悪霊を追い出したり、多くの病人を癒やしたりすることが

できたのです。そのため弟子たちは、汚れた霊を追い出すのは初めてではなかったのです。やったことがなかったから追い出せなかったのではないのです。以前はできていたのに、今回はできなかったのです。

弟子たちも、なぜ自分たちが以前できていたのに今回できなかったのかが分からなかったのです。そこで弟子たちは、イエス様に尋ねるのです。「**私たちが霊を追い出せなかったのは、なぜですか**」。するとイエス様は、こう言われます。「**この種のものは、祈りによらなければ、何によっても追い出すことはできません**」。イエス様は、弟子たちには「祈り」が欠けていたと言うのです。また同じ出来事が書かれているマタイの福音書では、「**あなたがたの信仰が薄いからです**」(マタイ 17:20)とも言われました。イエス様は今日の聖書箇所でも、弟子たちが霊を追い出せなかったことを聞くと、「**ああ、不信仰な時代だ。いつまで、わたしはあなたがたと一緒にいなければならないのか。いつまで、あなたがたに我慢していなければならないのか**」と言われました。弟子たちが霊を追い出すことができなかった原因、この親子を助けることができなかった原因は、弟子たちの「信仰」と「祈り」が欠けていたからだと言われます。

おそらく弟子たちは、自分の力で霊を追い出そうとしたのだと思います。以前できたのだから今回もできるはずだと思って、霊を追い出そうとしたのだと思います。おそらく宣教旅行に遣わされた時は、初めての経験だったので、イエス様の権威に信頼して、祈りをもって霊を追い出し、病を癒したのだと思います。しかし彼らは、経験を重ねるうちに、「信仰」と「祈り」を忘れ、自分の力に信頼するようになっていったのではないのでしょうか。自分の力で、人を助けられると思うようになっていったのではないのでしょうか。彼らはいつの間にか、イエス様の力ではなく、自分の力を信じるようになってしまったのではないのでしょうか。

こういうことは、私たちにもよくある経験です。最初は神様に祈り、神様に信頼しなければできないことだったけれど、慣れてくると、祈らなくなり、自分の力でできるように思ってしまふ、自分の力で人を助けられると思ってしまふ、そういう弱さがあります。しかしイエス様は、本当に人を助けたいなら、自分の力を信じるのではなく、イエス様の力を信じなければならない、イエス様の力を信じるなら祈らなければならないと言われるのです。「祈り」と「信仰」は、深く結びついているものです。私たちは、自分の力に頼る時、祈らなくなります。しかし自分の無力さを痛感し、イエス様に頼らざるを得ない時、祈るようになります。「不信仰」とは、イエス様の力を信じないで自分の力を信じることだと思います。逆に、「信仰」とは、自分の力を信じないでイエス様の力を信じることだと思います。「不信仰」の時、私たちは祈らなくなります。自分の力を信じているので、祈りの必要性を感じないからです。逆に「信仰」を持つ時、私たちは祈るようになります。イエス様の力を信じているので、祈りの必要性を感じるからです。

3. 父親の不信仰

弟子たちが霊を追い出せず落胆していた父親は、イエス様が山から降りて来られるのを見ると、イエス様のもとに駆け寄ってこう言います。「おできになるなら、わたしたちをあわれんでお助けください」。

この父親は、「息子をあわれんでお助けください」と言うのではなく、「私たちをあわれんでお助けください」と言います。この言葉から、この父親も助けが必要であることが分かります。彼は長い間、耳が聞こえず、口もきけない息子を抱え、突然の発作的な行動によって怪我や命の危険に絶えず怯えながら生活していたのです。その生活に父親自身も疲れ切っていたのではないのでしょうか。

しかしイエス様は、この父親の「おできになるなら」という言葉を問題にします。そして父親にこう言われるのです。「**できるなら、と言うのですか。信じる者には、どんなことでもできるのです**」。イエス様は、この父親に「信仰」を求められたのです。イエス様の力を信じることを、イエス様には「**どんなことでもできる**」と信じることを求められたのです。

すると父親はすぐに、こう答えます。「**信じます。不信仰な私をお助けください**」。父親は、イエス様を「信じます」、イエス様には「**どんなことでもできる**」と「**信じます**」と告白しています。しかし同時に、「不信仰な私」と言うように、自分は「不信仰」だとも認めているのです。父親は、信じます。「だから」息子を助けてください、とは言いませんでした。そうではなく、信じます。不信仰な私を、弱い私を助けてくださいと言ったのです。父親は、完璧な信仰は持っていませんでした。弟子たちが助けられなかったのだから、イエス様もダメかもしれないとどこかで疑う心もあったのだと思います。しかし、「**信じる者には、どんなことでもできると**」と聞いて、イエス様を信じてみたいと思ったのです。イエス様を信じることで、本当に自分と息子が助かるなら信じてみたい、信じてみようと思ったのです。完璧な信仰ではないけれど、疑う心も拭き切れないけれど、足りないところはイエス様に助けてもらって、何とか信じてみたいと思ったのです。

イエス様は、父親のこのような信仰をどう見られたのでしょうか。「不信仰では駄目だ」「完璧な信仰でなければ駄目だ」「疑う心を拭いてから直して来い」と言われたのでしょうか。そうではありません。イエス様は、父親の信仰に答えて、息子から霊を追い出されたのです。イエス様は、父親の信仰を受け入れてくださったのです。

父親は、自分を信じることを止めたのではないのでしょうか。自分の信仰は弱く、あやふやなものだと認めたのではないのでしょうか。自分の信仰は頼りないもので、いつまで経っても完璧になつたり、疑いを完全に拭き切ることなんてできない、だから自分を信じるのではなく、イエス様を信じようと思ったのだと思います。それが、「**信じます。不信仰な私をお助けください**」という言葉になって現れたのだと思います。

イエス様が私たちに求めている「信仰」とは、自分を信じるのではなく、イエス様を信じることではないかと思います。私たちの信仰は、大変あやふやで、頼りないものです。浮き沈みもあります。その自分の信仰を頼りにしていたら大変なことになります。そうではなくて、イエス様は、イエス様を信頼することを求めているのではないのでしょうか。頼

りない自分、弱い自分、不信仰な自分、それを全部ひっくるめてイエス様にお任せしていくこと、お委ねしていくこと、それが、イエス様が私たちに求めている「信仰」ではないでしょうか。結局のところ、イエス様が求めているのは、「あなたは自分を信じていくのか、それともわたしを信じていくのか」ということではないでしょうか。

おわりに

弟子たちは、霊を追い出せなかったのに、なぜイエス様には霊を追い出すことができたのでしょうか。イエス様は、「それは、わたしが全能の神だからだ」とは言われませんでした。そうではなく、「**この種のもは、祈りによらなければ、何によっても追い出すことはできません**」と言われました。イエス様は、祈る方でした。福音書を見ると、イエス様は朝早くまだ暗いうちに起きて、祈っておられました（マルコ 1：35）。また時には、群衆から離れて、山に登って祈られました（マルコ 6：46）。イエス様は、群衆のために祈られたからこそ、多くの病人を癒やし、霊を追い出すことができたのだと思います。イエス様も、自分の力に信頼するのではなく、神様の力を信頼して、祈られたのです。

イエス様は、私たちのために祈ってくださいました。だからこそ、私たちは救われたのです。Iヨハネ 2：1には、こうあります。「**もしだれかが罪を犯したなら、私たちには、御父の前でとりなしてくださる方、義なるイエス・キリストがおられます**」。イエス様は今、天におられる父なる神様の右の座で、私たちのために神様にとりなして下さっているのです。

父なる神様とイエス様によって遣わされた聖霊も、この地上で今も私たちのために祈って下さっています。ローマ 8：26にはこうあります。「**御霊も、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、何をどう祈ったらよいか分からないのですが、御霊ご自身が、ことばにならないうめきをもって、とりなしてくださるのです**」。聖霊は、私たちが祈れない時、弱い私たちのために神様に祈ってくださるのです。

イエス様は、神様の力を信じて祈っていたからこそ、人々を救い、助けることができたのです。そうであるならば、私たちも、誰かを助けようと思う時、自分の力を信じるのではなく、イエス様の力を信じて、祈っていきたいと思うのです。

またイエス様は、また聖霊は、私たちのために祈って下さっています。ですから私たちは、自分を信じるのではなく、イエス様を信じていきたいと思うのです。「信じます。不信仰な私をお助けください」と、弱いまま、不信仰なまま、イエス様の祈り、聖霊の祈りに身を委ねて、イエス様を信じていきたいと思うのです。

パウロも、肉体に何かの病気を持っていたようです。彼は、三回祈ったけれども、癒やされなかったようです。するとイエス様は、パウロにこのように言われました。「**わたしの恵みはあなたに十分である。わたしの力は弱さのうちに完全に現れるからである**」(IIコリント 12：9)。イエス様の力は、私たちの弱さのうちに現わされるのです。自分の無力さを嘆いて、イエス様に祈る時に、自分の不信仰に嘆いて、イエス様に身を委ねる時に、イエス様の力が私たちに現わされるのです。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちは生まれながらにして、自分に固執します。自分を信じ、自分の力を信じて歩もうとします。そして強さを身につけようとしています。しかしイエス様は、弱さのうちに力が現わされると言い、パウロは、自分が弱い時にこそ強いと言いました。自分という存在は、不確かで、大変あやふやなものです。どうか全世界の造り主であり、全知全能の神であるイエス様にこそ、頼って歩めますように。確かにあなたは目には見えません。しかし信仰の目を開いてくださり、あなたと御霊の祈りに身を任せて、歩めますように。またあなたのように、祈り深くあり、人々に仕えていけますように。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。